



TITLE:

<批評・紹介>東亜史研究(満洲篇)
和田清著

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

CITATION:

日比野, 丈夫. <批評・紹介>東亜史研究(満洲篇) 和田清著. 東洋史研究
1957, 15(3): 345-346

ISSUE DATE:

1957-02-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145887>

RIGHT:

批評・紹介

東亞史研究（滿洲篇）

和田 清 著

昭和三十年十二月 東洋文庫論叢第三十七 東洋文庫
A5判 本文六八八頁、圖版 四、地圖 二、索引

この書物をはじめて拜見してから、もう一年ちかくもなるが、わたくしごとき門外漢が紹介の筆をとつては、かえって禮を失することになるとおもひ、滿洲史専門の某氏におねがひしてみたが、やはりわたくしの番になった。いつか和田先生から、このごろ歴史地理のような學問をするものが、だんだん少くなつてきたが、おまえは若いのにそれをやっている、というようなお便りを頂戴したことなどをおもひだしつつ、この七百頁にちかい大冊を通讀させていたのだのである。おさめられる十八篇の論文は、二三をのそばびみなかつて讀んで益を受けたもので、わたくしにとってはなつかしいおもいででもあつた。

内容は時代順に配列され、「玄菟郡考」「魏の東方經略と扶餘城の問題」「渤海國地理考」「唐代の東北アジア諸國」「元菴考」「安定國について」「元代の開元路について」「開元・古州及び毛憐」「滿洲を三韓といふことについて」「明初の滿洲經略」上、下、「建州本營の移動について」「海西東水陸城站について」「明末に於ける鴨綠江方面の開拓」「滿洲諸部の位置について」「清祖發祥の地域について」「清の太祖興起の事情について」「清の太祖の顧問龔正陸」、歴史地

理の問題が多く漢から清にいたるまで、ほとんどすべての時代にわたっている。いずれも開拓新しい滿洲史の分野において、舊説の是正に、あるいは問題の解決に、著者獨特の明快な論斷をほどこして滿洲史建設の一步一歩をきすきあげてこられたものである。じつに著者の四十年にわたる滿洲史研究の全貌は、ほぼこの書にもらわれているといふことができよう。滿洲史の研究がどんなふうに發達してきたか、各時代にどんな問題が提起され、どんな文獻があるかということも、いちおうはわかるし、ともかくいろいろな雜誌につていたものが、こうして一冊にまとめられたことは、なんといつても便利このうえない。そのうえ、舊説も改むべきは、できるだけ改められたということであり、總索引のほか、いちいち追記を附して、その後の新しい研究や補遺を加えていられるのでなおさらである。著者の滿洲史に關する論文は、なおこれだけにはとどまらないのであつて、他に重要なもの數篇が舊著「東亞史論叢」のうちにもおさめられていることを注意しておかねばならぬ。

いったい歴史地理に關する論文は、地名の考證にわたることが多く、無味乾燥で讀みづらいものである。よほど必要にせまられたばあいでない、なかなか觸手がうごかないのがふつうである。それが、和田先生の論文になると、まことにすらすらと、きわめてむづかしい考證も、いつとはなしに通過して、論旨をまらがいなくつかむことができる。これは、先生の熱意のある文章と、見通しのきいた明快な論法とによることはもちろんであるが、やはり一方では概説の大家でもあられるからだともう。滿洲は世界の片田舎だといつて、そのまた片田舎の地理を論ぜられても、たえず廣い視野に立つていられるということが、讀者をひきずつて行く力となつてい

にちがいない。わたくしが、先生の講席に列したのは、昭和十年、京大で明代制度史を三週間にわたって講ぜられたときだけであるが中国制度史の一部として、全體との關係や特徴を具體的に教えられたことが、いまなお脳裏に鮮かである。

最近、お體をわるくされていたとうけたまわっていたが、健康を回復され、十一月には久しぶりで京都によられた。しかし、だいぶ年をとられたようにおみうけした。今後ますます健康に留意されて、姉妹篇たる蒙古篇をはやく完成していただきたいものである。本書の序文は簡略な滿洲研究史であり、附録の「學究生活の想出」はかつて雜誌思想に出たもので、先生の一代記であるとともに、四十年間のわが國の東洋史學發達史としておもしろい。

(日比野丈夫)

東南アジア史研究 I

杉本直治 郎 著

昭和三十一年五月

日本學術振興會

A5判 七八五頁、他に圖版二頁、附圖三葉

本書は著者杉本博士が過去三十餘年間に學術雜誌・紀要・論文集等に掲載發表した東南アジアに關する諸論考中より代表的な十五篇を選んで収録したものである。本書の刊行は博士の廣島大學教授退官記念事業の一として同大學東洋史學教室を中心とする記念事業會によって計畫推進されたというが、博士はこの刊行にあたって収録の各篇に再檢討を加え、必要な補訂を施し、そのためなかにはまったく面目を一新し、舊説をすて新説をたてたものさえある。博士はこれについて序言の中で「學者としての節操は研究途上に築いた自

己の説に對する節操でなく、あくまで眞理に對するそれでなければならぬ」と言い、その眞理探求に對する眞剣な態度がうかがわれるが、これにより本書は博士が永年の研鑽によつて築いた少くとも現在までの最後の成果を示したものであることが出來よう。

次に各篇の内容について順次簡単に紹介して行くことにする。なお各題下の括弧内に舊稿の發表された雜誌等の名稱、號數を附記しておく。

安南に關するもの二篇

一、「秦漢兩代における中國南境の問題——ヴェトナムにおける中國の政治支配はいつからか——」(史學雜誌第五十九編第十一號)

秦の嶺南經略後に同方面におかれた三郡中の象郡の位置、および漢の武帝の南越征服後におかれた九郡の名稱について論じたものである。前者については秦の象郡の南端がヴェトナムの中部以南におよんだと考えるオールソン氏の説や、それがいまの中國の境域内にとどまったとするH・マスベロ氏の説を斥け、象郡中に含まれていたとみられる西甌國の位置を考定することによつてその南端はトンキン平野の北部あたりにあつたであらうとし、次に後者については通説の「儋耳・珠崖・南海・鬱林・蒼梧・合浦・交趾・九真・日南」計九郡中より南越征服の翌年に別に設けられたという海南島の儋耳・珠崖二郡を除き、かわりに桂林・象の二郡を加えるべきだととく。注目すべき新説であるが、九郡問題については漢代桂林郡の存在した證據のまったくないことが博士も認めているようにこの説の最大の弱點であらう。

二、「五代宋初に於ける安南の土豪吳氏に就いて——安南の獨立に關する一見解——」(内藤博士還曆祝賀支那學論叢)